

論文の和文要旨

論文題目	教育デザイン研究アプローチによるオンライン日本語教育実習の学習環境デザイン論
------	--

氏名	守屋久美子
----	-------

本研究は、教育デザイン研究のアプローチに基づいてオンライン日本語教育実習の実践を複数年にわたって実施し、オンライン上での日本語教育実習の実施と実習生の効果的な学びの達成を目指した学習環境デザインにおけるデザイン原則の導出を試みた研究である。第1章では、本研究の枠組みである教育デザイン研究について概観した。教育デザイン研究は「複雑な要因が絡み合って成立している教育実践現場に研究者が入り込み、あるいは実践者自らが研究者となって、教育実践をデザインする中でこれまでの研究知見を活用し、それを発展させていくための枠組み」(鈴木・根本 2013) である。本研究は、マッケニー・リーブス (2021) が示した段階的かつ発展志向的な教育デザイン研究のプロセスに従い、課題の分析と探索、デザインとその構築、評価・省察という3つのフェーズを反復的に実施することで、オンライン日本語教育実習の学習環境デザインに関するデザイン原則の提示を目指すこととした。その後、全体の見通しとして本研究が3つのサブサイクルから構成されることを示した。

第2章から第3章は1つめのサブサイクルに該当し、先行研究の探索と解決課題の導出を行った。第2章では、日本語教育実習と遠隔教育という2つの側面に関する先行研究からオンライン日本語教育実習という実践を描き出した。まず、2019年に文化庁の文化審議会国語分科会により提示された「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)(改定版)」で提示された「日本語教育人材」に日常生活で日本語学習者と接触する援助者を加えた「日本語学習関連人材」を設定し、「日本語学習関連人材」の養成のためにそれぞれに適合する日本語教育実習の模索の必要性を示した。続いて、日本語学習関連人材の養成および日本語教育実習で養成されるべき能力について日本語教育に関連する専門性と異文化などに対する態度を含む人間性、さらにそれらを研鑽していくための自己教育力があることを整理した。その後、日本語教育実習の構築には手配段階、準備段階、接続段階および評価段階が必要であることを確認し、また、広義の日本語教育実習に関する試みから教養としての日本語教育の広まりを確認した。一方、遠隔教育の側面では、2020年の新型コロナウイルスのパンデミックを経て、実施手段に焦点が当てられていた遠隔教育から同期・非同期に焦点が当てられたオンライン授業へという理解の変化を指摘した。その上で、これまで遠隔教育の文脈で挙げられてきた理論を整理し、オンライン日本語教育実習との関連性を論じた。

第3章では、先行研究を踏まえながら本研究で行うオンライン日本語教育実習における課題点を整理した。筆者がアシスタントとして関与したオンライン日本語教育実習に参加した実習生と担当教師に対するインタビューの結果を分析し、得られた知見をもと

に行ったプロトタイプ実践を行った。その結果、本研究におけるデザインは「(Ⅰ) 授業外活動としてのインターネット上での実習の実施」および「(Ⅱ) 日本語教育に関する多様な知識・技能の習得を目指した学び」のそれぞれの部分にアプローチを行う必要があることが示された。得られた課題点をもとに、「どのような学習環境をデザインすれば、さまざまな背景を持つ実習生が3か月にわたる実習期間において学習者に対して適切な授業を構成し、遠隔での実習を実施することができるようになるか」を本研究における研究課題として設定した。

第4章から第6章までは2つめのサブサイクルに該当し、学習環境のデザインと実践を通じた評価を行った。第4章では、1つめのサブサイクルから得られたデザイン要件に基づいて本研究で行う実践の初期デザインを行った。「(Ⅰ) 授業外活動としてのインターネット上での実習の実施」については言語学習方法であるタンデム学習の手法を手がかりとし、実習生と学習者の双方が学び合うことができる互恵性と双方が主体的に学びを深める学習者オートノミーの概念を適用することを示した。日本語を学ぶ学習者の反応から教育実習生が学ぶという構図を持つ本実践におけるタンデム学習を「拡張的タンデム学習」と位置づけてデザインを行っていくこととした。一方、「(Ⅱ) 日本語教育に関する多様な知識・技能の習得を目指した学び」の達成を目指して課題解決型学習を行うことを提案し、その理論的背景について整理した。課題解決型学習の「駆動質問の設定」、「協働学習」、「成果物の作成」という特徴に加え、実習生の多様な背景やニーズに対応するために個別的な課題の設定を行い、「個別的課題解決型学習」と位置づけてデザインを行っていくこととした。これらの理論的背景をもとに設計したデザインが成立し、学習効果が得られたかを確認する道標として Sandoval (2014) が示した推論マップを作成した。

第5章から第6章では研究課題に従って実践を行い、データ収集と分析を経て上述の推論マップに関して検討した。第5章では、専門的な日本語教師を目指す実習生を対象にして実施した大学院レベルでのオンライン日本語教育実習に言及し、拡張的タンデム学習および個別的課題解決型学習について分析を行った。「拡張的タンデム学習」として学習者に対する実習授業を行った結果、実習生は「互恵性」によって学習者中心の実習授業の構築を意識するようになったことが示された。一方で、学習者側へのアプローチも必要であることが示された。また、「個別的課題解決型学習」のデザイン推論に関する分析を通して実習生による個別の目標設定が充実した議論に影響を与え、協調学習を通して設定した目標以外についても学びを深めたことが示された。一方で、評価可能な目標設定のための支援が必要であることが明らかとなった。さらに、実習生は特にテクノロジーと教授方法の統合に関する理解を深めたことが示された。しかし、自由記述の分析からは教育内容に関する理解の不十分さが示され、テクノロジーと教授内容、教授法の統合について個別的課題解決型学習の中で扱う必要性が示された。また、インタビューからは各自の達成課題に関する協調的な議論が自己教育力の養成に寄与していたと同時に他者との協調議論によって実習生は取捨選択を行いながら学びを深めていたことが示唆された。

第 6 章では、第 4 章で設定したデザインに基づいて、学部生を対象にして実施した教養としての日本語教育学を目指したオンライン日本語教育実習に言及した。第 7 章では実習生の学びを深めるための方法としてオンラインでのインタビュー活動を行うこととし、実習生間の議論もすべてオンライン上で実施した。分析の結果、インタビュー活動を通して実習生は学習者から多く学んだものの、学習者側の学びは多くなかったことが示された。インタビュー活動としての成立要因を探ったところ、互恵性は複数回の実践で継続的に行う場合に場合にのみ求められる可能性が示唆された。「個別的課題解決型学習」を通して個別目標の設定とそれに関連するレポート作成がなされ、協調学習においても第 6 章の実践同様に自分の目標設定とは関係がない部分でも行われていたことが明らかとなった。さらに、「個別的課題解決型学習」を通じた学習成果については、教養としての日本語教育として学習者への態度や自らの日本語力への内省が行われていたことが示された。一方で教師側からのフィードバックを求め、自己評価の基準に悩む実習生が見られた。そのため、より具体的な指導を行う必要性が示唆された。

第 7 章から第 10 章までは 3 つめのサブサイクルに該当し、デザインの修正とデザイン原則の導出を行った。第 7 章では、第 5 章および第 6 章の実践結果を踏まえ、デザインの修正を行った。拡張的タンデム学習としての日本語教育実習では学習者側のオートノミー養成の不十分さが指摘され、自他共導型学習を組み込むこととした。その結果、拡張的タンデム学習に関する推論マップの修正がなされた。一方、個別的課題解決型学習については、目標設定および評価支援、TPACK に関する意識づけを実施形態に組み込む必要が示された。その結果、学習成果に「実習生のテクノロジーの使用に関する意識の向上」が明示的な学習成果として期待できることが示された。

第 8 章では、修正されたデザインを元に実践を行った。その結果、実習授業における互恵性を相手からの貢献に対する返報性の規範に基づく動的な行動として捉えるのが適切であることが示された。また、学習者側の学習者オートノミーの養成に対する試みは見られたものの、実習授業という短い期間の授業外活動では学習者の意識転換は困難であることが示された。一方、個別的課題解決型学習では実習生は他者からの経験共有が議論を通じて「自分ごと」として受け止められ、「他者の経験共有を通じた個人の経験の拡大」が達成されていた。さらにテクノロジーを用いた日本語教育に関する意識を変化させる可能性があることが示された。

第 9 章ではそれまでの実践の結果を踏まえ、さらに本実践とは異なる文脈での実施考慮した総合的な考察を行った。その結果、オンライン日本語教育実習の統合的推論マップが作成された。

第 10 章では、本研究から得られたオンライン日本語教育実習のデザイン原則として、「実習授業構築の前提条件におけるデザイン原則」、「実習生-学習者の双方の学びを促すことを目的とした実習授業におけるデザイン原則」および「実習生の自己教育力と専門性の養成を目指した教室の場におけるデザイン原則」を提示し、本研究の結論とした。ま

た、日本語学習関連人材の養成方法とタンデム学習に対する理論的還元を行った。